
朝日が登るまで

白虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝日が登るまで

【Nコード】

N3261A

【作者名】

白虎

【あらすじ】

ある日こたつで眠ってしまった俺は突然朝日が見たくなった。

（前書き）

相変わらず短い小説ですが、どうぞお楽しみ下さい。

年末恒例の大型歌番組の途中、俺はどうやら眠ってしまったらしい。

「AM5:00、もうすぐ朝か」

テレビの音が入ってくるのが不快だった。

つけっぱなしで寝てしまったこたつの温もりは好き。

ただ、喉が痛い。

外はもう真つ暗ではなく薄暗い程度までになっている。それを見た時に、ふと思った。

「朝日が見たいな」

思うと行動は早い。こたつで寝たせいだろう、体がだるいがそんな事は障害にならない。

温かいこたつから寒い部屋へ飛び出すと、上着を羽織り、二階へ急いだ。

廊下の床も冷たい。足の裏が廊下の冷たさでビリビリと痛い。

「靴下履いてくれば良かった」

多少の後悔があったが屋根に出る事の出来る窓の前に立つと、思い切って開け放った。

その瞬間身を切るような寒さが俺の体を通り過ぎた。

体が小さく震える。真冬の朝の空気は本当に冷たい。

それでも朝日を見るべく屋根に移動し、そのまた上の屋根によじ登る。

屋根の真ん中に立って朝の景色を見ると、辺り一面もやが包み込んで意外にも神秘的なものだった。

そう言えば子供の頃も同じ事をしていた。そしてその時も、この光景に痛く感動した。

いつから忘れていたのだろうか？あの時は絶対に忘れないと決めたはずなのに、時が起てばどうでも良くなってしまふ事は多い。

それだけ俺はいい加減な人間なのだ。他の人もそうだと言われても、他人がそうだからと言って自分も同じでいいやと言うのは嫌いだ。

はつきりと自分を持つていたい。

この事を思い出させてくれただけでも今日はいいい日だ。

過去の自分を、今の自分と重ね合わせている内に辺りは真っ赤な光に包まれ始めている。

「ああ、これだ」

俺が見たかったのは、世界を真っ赤に染めながら、遠くの街からゆ

つくりと顔を出す、この朝日だ。

それからしばらく俺は眺めていた。どこか懐かしい、とても寒い真冬の朝に、温かな光で俺を照らしてくれるその朝日を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3261a/>

朝日が登るまで

2011年1月6日02時51分発行